山のおじゃまむし

平成30年度号

一般財団法人 自然学総合研究所　野平 照雄

はじめに

昆虫類の中には害虫と呼ばれ、目の敵にされているものがいます。農業、林業、果樹や花卉などに被害を及ぼす害虫や私たちに激痛、湿疹、痒みなどを与える毒虫などです。このほか、姿だけで得体の知れない虫、気味が悪いといって嫌われている不快害虫？もいます。その数は無数です。

しかし、これらの害虫も地球に棲む生物の一員。厳しい自然界を生きています。その生き様は実に巧妙です。驚きます。その知恵には感心してしまいます。

このシリーズは私が目にしたこれら害虫の生活やその時の出来事、感じたことをエッセイにしたものです。学術書ではないので軽い気持ちで読めると思います。暇なときや気分転換を図るときに御笑読いただければ幸いです。

なお、タイトルは「**山のおじゃまむし**」となっていますが、山にはたくさん害虫がいるからという単純な発想からです。このため、山だけでなく田、畑、果樹の害虫から一般昆虫、さらに昆虫でない動物も登場します。

今回から平成３０年度号となります。

一般財団法人自然学総合研究所　理事　野平 照雄

山のおじゃまむし（６０）
超普通種、オジロアシナガゾウムシ

昆虫マニアの間では、あまり採れないものを珍品、これよりさらに採れないものは大珍品としている。逆によく採れるものは単に普通種と呼んでいる。最近では、これに「超」をつけて「超大珍品」、「超普通種」などと呼んでいる者もいる。私はゾウムシ採集を行っているが、残念ながらこの超大珍品というものは数匹しか採っていない。逆に超普通種はずいぶん採集した。さすがにこれだけ採ると嫌気がし、最近では見向きもしなくなってしまった。過日、これが災いして、「しまった」となってしまった。

×　　×　　×　　×

女房と根尾村の左門岳へ登山に出かけた。ところが数日前の豪雨で登山道に通じる道路が決壊し、通行止めとなっていた。仕方ないのでゾウムシを採集することにした。しかし、暑いだけでゾウムシはあまり採れなかった。「山登りでけちがついたおかげで、虫も駄目だ」と女房に愚痴をいい、昼食にした。おにぎりを食べていたら足がむずむずしてきた。なんだろうとズボンの裾をあげたら、足に大きなヒルが８匹も食いついていた。どれも血をすって丸々としていた。足は血だらけで、さすがの私も鳥肌がたった。女房は見たとたん食欲がなくなってしまった。ヒルは足から離れなかったので、私は思いっきり引き抜いた。そのあとからは血が流れ出てきて血の海となった。ヒルは憎しみをこめてすべて踏みつぶした。ここも血の海となった。

×　　×　　×　　×

昼食後はヒルのいる藪へ入らずに採集することにした。これだったらヒルには食われないだろうと、木の葉や枝にいるゾウムシを探した。しばらくしたら今度は首がおかしい。またヒルに食われたのかと首に巻いているタオルをとったら、やはりヒルが食いついていた。木の上から落ちてきたのである。もちろん、このヒルも血祭りにあげた。そのあとは首にタオルを巻かずにより慎重に採集を続けた。しかし、ヒルの方が一枚うえだった。今度はわき腹に２匹食いついていたのである。首にタオルを巻いていなかったので、直接服の中へ入ったようだ。これだけ食われるとさすがの私も集中して採集ができなくなった。こうなると採れるのは普通種ばかりである。中でも多かったのは超普通種のオジロアシナガゾウムシであった。この超普通種は最初から採るつもりはなかったので、そのつど捨てた（逃がした）。帰り間際にまたオジロアシナガゾウムシが２匹採れた。２匹とも今までのものよりはるかに小さかった。「こいつは栄養不足か」と思い、何となく１匹だけ持ち帰った。

×　　×　　×　　×

家に帰って風呂に入ろうとしたらシャツが血に染まり赤くなっていた。よく見ると腹に２ヶ所の食いあとがあった。ここから血が出ていたのである。洒落ではないが、ヒルは腹から腹一杯血をすって出て行ったらしい。結局この日は１３匹のヒルに血を提供してしまった。無性に腹がたってきた。風呂から出て、採集したゾウムシを整理し始めた。びっくりした。中に超大珍品のシロオビクロタマゾウムシがいるのである。「しまった。もう一匹もこいつだった」と思った。小さなオジロアシナガゾウムシと思っていたのが、実はこの超大珍品だったのである。この２種はともに鳥の糞のような白と黒の入り混じった模様なのでよく似ている。老眼の進んだ私は色模様だけで、超大珍品を超普通種と判断してしまったのである。悔やんだけど後の祭りであった。はじめにけちがついたら、最後までけちのつきどおしであった。こんなことってあるのだろうか。きっと、こんな日は仏滅だろうとカレンダーを見たら皮肉にも大安であった。